

春の彼岸によせて

令和二年三月 大乘寺 長老 岡 光俊

今回は、成長期に生甲斐をなくした方々のことに触れたいと思います。

人が生き続けるために必要不可欠な精神的エネルギーを「生甲斐」というのでしょうか。

この「エネルギー」を持ち続けることができないことで社会生活がしづらいかたがおられます。

鬱、拒食症、引き籠もり、自傷自死行為等の症状をお持ちの方々からお話を聞かせて頂くなかで、年齢に関係なく共通の要因があることが解ってきました。

それは、乳幼児期、少年期、青年期での親の人格軽視です。

人は生まれたときから『人格』〔「今、私はこうしたい、して欲しい」という意志』』を持っています。

まだ言葉を話せない乳児は、泣く、笑うといった表現しかできませんが、「乳児だから何も解るはずはない」という思い込みや決めつけが、子供の「人格」とは異なった行動をしてしまいます。

これが、大きなストレスの始まりです。

そして、この状況が悪化し、長期化すれば精神に障害が生じてしまいます。

「あなたを産み、育てた私が一番あなたのことを熟知している」

親の指示にさえ従っていれば、あなたの人生は間違いない。子供が主体的にしようとすることは完全否定。

子供は、気持ちを理解しようとしめない親の言動に日々、膨大なストレスを溜めていきます。

彼らは、色々な方法で信号をだし続け、理解を求めますが、親は「思い込み」により、都合のよい考えを正当化していきます。

ストレスが限界に達し、精神が破綻したとき、無感情や無関心、

思考停止、幻覚や幻聴による自傷自死行為、拒食症、鬱、引き籠もり等、人生を諦める選択をし始めます。

我が子を思つてのことですが、結果は真逆となつてしまい、これほど悲しいことはありません。

これらを防ぐためにも、幼子からの「人格」にしっかり向き合つて頂ければと思います。

思い込みや權威を振りかざして子育てをされているかたは、子供が将来、生甲斐をなくすのではと疑つてみて下さい。

我が子を人格者として向き合い、尊敬の心で本人の意志を確認すれば、子供は生甲斐を沢山作り出し、思い遣りの心を持った人へと成長するでしょう。

思い込みや決めつけ、我が子への対応の仕方は、教えてもらったからとすぐに変わるものではありません。

お釋迦さまも人の言動の根底には心の状態が大きく関係していると説かれ、心の根底を細かく六つに分けて「六根（眼、耳、鼻、舌、身、意）」とし、般若心経にも六根を浄めること。また、人の心を変えるためには、お釋迦さまの教えを聴かせて頂き、その教えを実行していくことが必要であると説かれています。

お釋迦さまの教えやご先祖さまを想い、大切にし続けることは、何十年、何百年と引き継がれてきた各家の伝統やしきたりです。正しく引き継がれているからこそ、できるお墓参りではないでしょうか。

亡き親や知人と話をしにこられるかた、近況報告にこられるかた、春の彼岸の頃は子供や孫の入学、ご自身の就職のお礼にとこられるかた等、ご先祖さまが代々続けてこられた結果ではないでしょうか。だからこそ、ご先祖さまとも、心がしっかりと繋がり、ご先祖さまもお喜び、皆さまのご報告をお聴きになつておられるのでしょうか。

生命とは、このように感謝の帯となつて繋がり、何百年とご先祖さまと共に続いてゆくものだと思います。

お墓は、ご先祖さまとなられた親や祖父母の存在があつたことを子や孫、ひ孫に目に映る形として現し、皆さまが掃除をし磨き、お

供物を盛り、密や榊を手向け、蝋燭に火をつけ、香りよき線香を燻らせて頭を垂れることで、生命の流れ、感謝をすることの人としての尊い営み、心のありかた、心の成長を頂くことになるのでしよう。

皆さまのお墓参りを通して改めてお墓の持つ、多くの役目に気づかせて頂きました。

生命の繋がりがた、ありかた、心の拠りどころとしてこれからも参拝されること、ご先祖さまを生かし、皆さまが生き活きと生かされてゆく、身近で清らかな場となりますよう祈願させて頂きます。

春の彼岸、先祖代々の永眠の地、心の故郷であるご先祖さまのお墓に、月に一度は顔をお見せにお越し下さい。ご先祖さまへの尊敬の想いがしっかり根づく家族から、生甲斐をなくす子孫が育つことはありません。